日本景観フォーラム会報　第 58 号　　発行日　2025 年 7 月

景観フォーラム

巻頭言

トランプ劇場がまた始まった。自由主義の旗艦たる存在が「関税」か？核兵器廃絶時代に「防衛費増強」か？無知極まりない強情なこの男と世界は以降４年間も間付き合わなければならないことになる。このドナルド・トランプという男とかのナチズムを率いたアドルフ・ヒトラーは酷似しているようである。が、時代は８０年以上も経過しているし、民主主義の旗手であるアメリカ合衆国という国に生まれた男が、かの大量虐殺即ちホロコーストを実行せしめた狂気の天才に類似しているとはどういうことだろうか。

先ず、自分のカラーを出したがり、徹底的に自分よがりで、他人の意見を素直に聞かない。即ち、極めて独善的であるといことだ。民主主義のお手本の国にいながら、民主主義に基づいた制度に則った方法で、物事を運営したがらない。そして１００年前の米国の繁栄の在り方がすべてであると信じている。ヒトラーが信仰していたアーリア人が最良の人種であるという選民思想に酔いしれていたように、トランプも恐らく白人至上主義が心の支えとなっているではないかと思われる。

では、ヒトラーが心に描いていた世の中の素晴らしい風景とはどういうものであったろうか。想像するに、それは、ヨーロッパが産み出した様々な芸術様式を統合し、自由主義を超越したアートの国家創造というものであったろう。だが、ヒトラーは民主主義が生み出した化け物と化した。それではトランプの素晴らしい世の中とはどういう景色であろうか。残念ながら、トランプにはヒトラーほど知性がないので、出来合いの出されたものを喜んで食べる飼い犬の如く故郷のフロリダ以上の景観は想像できないだろう。兎も角も、フロリダこそが天国であるからして、彼の頭にはニューヨークの景観は論外ではないだろうか。我々はトランプ政権に於いて民主主義が生み出す化け物を注意して見極めなければならない。“王”と呼ばれ始めてはいけないのだ。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長　斉藤全彦

＜日本景観フォーラム 2025 年度年間スケジュール＞

＊2025 年度とは 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日のことです。

2025 年

4 月 22 日（火）**第１回景観研究会**　総会・第１回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5 月 15 日（木）**第１回景観まちあるき**【池袋】
6 月 24 日（火）**第２回景観研究会　オンライン（16:00~18:00）**
7 月 26 日（土）**第２回景観まちあるき**【秩父】
8 月　　夏休み
9 月 24 日（水）**第３回景観研究会**
10 月 25 日（土）**第３回景観まちあるき**【水戸】（検討中）
11 月 18 日（火）**第４回景観研究会**
12 月 18 日（木）忘年会【恵比寿】

2026 年

1 月 24 日（土）**第４回景観まちあるき**【野田】（検討中）
2 月 24 日（火）**第５回景観研究会**
3 月 28 日（土）**第５回景観まちあるき**【横須賀】（検討中）

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

＜日本景観フォーラム 2024 年度年間スケジュール＞

＊2024 年度とは 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日のことです。

2024 年

4 月 23 日（火）**第１回景観研究会**　総会・第１回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5 月 12 日（日）**第１回景観まちあるき**【アークヒルズ】
6 月 25 日（火）**第２回景観研究会**（18:00～20:00）　於：JICA オフィス
9 月　7 日（土）**第２回景観まちあるき**【代官山】
9 月 24 日（火）**第３回景観研究会**（18:00～20:00）　延期
10 月 21 日（月）**第３回景観まちあるき**【洗足池】
11 月 19 日（火）**第４回景観研究会**（14:00～16:00）　オンライン会議
12 月 26 日（木）**忘年会**【恵比寿】中止

2025 年

1 月 7 日（火）新年会【目黒】ゆう月（18:00～）
1 月 25 日（土）**第４回景観まちあるき**【麻布】
2 月 25 日（火）**第５回景観研究会**（16:00～18:00）　オンライン会議
3 月 29 日（土）**第５回景観まちあるき**【三軒茶屋】

三軒茶屋を歩く

豊村泰彦

■住みたい街ナンバー１（ワン）

先日ネットで「東京・世田谷区にある三軒茶屋というエリアは『住みたい街ランキング』でナンバー１である」という調査結果を見つけた。いったいどんなところが人気なのであろうかいささか気になった。50 年ほど前までその近くに住んでいた者としては納得できる部分もあり、そのへんを追及してみる。たぶん街のあちこちに少々いい加減な部分があり、そこがかえってなにかとストレスが溜りやすい現代社会にあって癒される場になっているのではないかと解釈した。しかし、「いい加減」なところは東京や関東にもいっぱいあるのにどうしてそこがトップなんだろう？東京はとくに人口過密であり、変化やテンポが速い、店に入ってもスマホを使わないと注文ができない時代である。そんな時代にあって、まだ昭和のテンポが維持されているところがある。それはすごく貴重なことではないか。

●三角地帯の呑み屋街

21 世紀、AI 技術の導入によって私たちはますます便利で安全な社会を手に入れることになっていく半面、高齢者および高齢進行中の人にとっては楽しい感覚が遠ざかるになる気がしている。それが平成以後の社会である。そしてその社会形態はコンプライアンスの社会でもある。昭和感覚や前時代の感覚で仕事をしたり、日常の活動をすれば本人が楽しんだだけ「セクハラ」「パワハラ」というレッテルを頂戴することになる。だから 24 時間常に気を使って生きていかねばならない。テレビ局だろうと、映画アづくりの現場だろうとコンプライアンスの呪縛からは逃れられない。楽しくなる場や範囲はどんどん狭まっている。守れるのは自分の家だと思ったら大間違い。家庭にもまもなくコンプライアンスの領内に入る。しかし三軒茶屋はそこまで気を張らなくても住め

る所だ。カジュアルの範囲が広い。靴を履かなくてもいい。サンダル履きでいい。ネクタイをスカーフに変えてよい。沢田研二の「勝手にしやがれ」つい口ずさんでしまう。少しなら羽目を外してもいいかなと思える自由さがあるのが三軒茶屋である。

■昭和の街

●ダイナミックな広告

そう、三軒茶屋は今でもずっと昭和の街である。もう東京はほとんど平成、令和の街へと脱皮していった。みな解っているのだ。その中にあって、「三軒茶屋を眺めてその繁盛ぶりを見よ」と敢えて言わなくてもいい。今や「昭和最強のまち」として認知されたのだ。では三軒茶屋らしさはどこにあるのか？、それは駅周辺から「らしい」というエリアの一部にあり、人の目を気にせず自由にやろうよ」という態度が許されている場所がある。それだけで、元気が出る単純な人々もいるのだ。かつてニューヨークも無法化している酷いところも一部にはあったかもしれないが、ストレスを発散するところがあったから新しい文化やアートが生まれ、魅力的な街になったのではないか。そういう視点で三軒茶屋をもう一度眺めてみたい。

■三角地帯

●ねじ曲がった通路

歴史的なことを少し述べると、三軒茶屋は江戸時代中期ごろから交通の要衝として栄えていたが、戦後になると間もなく「闇市」という如何わしい場所がつくられた。「三角地帯」と呼ばれる一角には、今もなお飲食店をはじめとして小さな商店が軒を連ね、昭和レトロな面影を多く残している。

三角地帯というのは、国道 246 号線（通称二―ヨンロク）と世田谷通りが、二股に分かれるエリアをいつからかこう呼び、そこは、昔ながらの居魚屋・食事処が、所狭せましとひしめき合っていいる場所。狭い地帯に道路や店が不規則に並んでいるために迷路のようになっているところもあり、始めて訪ようとする人には少し勇気がいるところだ。

●選挙ポスター？

三角地帯のルーツはヤミ市だったということはすぐ想像がつく。昭和 24 年にアーケード「エコー仲見世」ができ、商店街が生まれた。しかし東京オリンピックの開催を境に街は大きく変化する。国道 246 号線の拡張。渋谷から三軒茶屋までの玉電（東急世田谷線の一部）の廃止、首都高速道路の開通があり、街は大幅に変わった。しかし、そのような急速な時代の変化に乗り切れず（乗る気もなかったと思う）、まるで時間が止まったままになっているのが、この三角地帯である。

●人生いろいろ、街もいろいろ

狭い路地というのは他にもたくさんあるが、この三角地帯の路地は、狭いだけでなく滅茶苦茶に不規則である。曲がりくねっていたり、道幅が極端に狭くなったり広くなったりして、先が見通せない。行き止まりだと思ってもたいていは抜けられる。そして狭い場所にもお店がある。狭いエリアなので、紛れ込んでも迷うことはないが、　初めての人がこの路地で行きたい店を探すには苦労するかもしれない。とにかくやみくもに歩き回るしかない。そのうちに、偶然目指す店に遭遇する。またはいきなり開けた場所に出たと思ったら三角地帯の外だったなどということはよくある。路地は闇市時代に自然にできた通路で、効率性や規則性とは無縁の世界だ。このように三角地帯は、「三茶」の生活空間の一部として、独特の文化が育まれてきたのである。

■かつて映画街

●看板だけが残った映画館跡

私が映画というものを始めて観たのは、まだ小学生に入ったばかりのころである。両親に連れられ、三軒茶屋に家族全員で観に行った。映画館で最初に観た映画は時代劇（当時は「チャンバラ映画」と言っていた）である。両親が好きだったようで大川橋蔵が出演していたようだ。その後、映画「ゴジラ」を家族で見に行った。ゴジラが上映されたのは 1954 年、2 年後には第 2 作目が上映された。観たのは 2 作目であるが小学校に上がる前である。それを観たときのショックはたいへん大きく、その恐さに泣き出してしまった。とにかくそのころまだテレビも入っていなく、映画が作り物ということが解からない子供だったので、その後遺症は大変だった。ゴジラは現実にいる怪獣だと思い込んでしまったのだ。PTSD 並みに、頭に焼き付いてしまったことは確かで、以来「ゴジラ」の夢を何度も見るようになり、夢の中でゴジラに追いかけまわされる悪夢に悩まされた。

その後テレビが家庭に普及すると娯楽は映画からテレビに移ったが、その後も時々三軒茶屋に映画を見に行った。映画はテレビと違って画面も音も大きく迫力があった。また、大きな看板やポスターが貼ってある劇場の雰囲気が好きで、観る前からぞくぞくして、映画の素晴らしさ面白さを感じた。

そのころ三軒茶屋には映画館がたくさんあった（5 から 6 館くらいかそれ以上あったと思う）が、三角地帯に接する世田谷通から少し入ったところに当時は数館が集中していた。年数を重ねるごとに映画館はつぎつぎ姿を消し、全国的に映画館が少ない状況になっても三軒茶屋では最近まで 2 館が上演を続けていた。しかし、10 年前に「三軒茶屋シネマ」が閉館したのを最後に三茶の映画館はすべてなくなった。「三軒茶屋シネマ」の建物は肉のハナマサの店舗に代わったが、ハナマサの看板の後ろには今も、当時の「三軒茶屋シネマ」の看板が残っている。なぜ今なくなった映画館の看板が残っているのか。それがこの三角地帯を象徴している特殊性なのだろう。

■銭湯

●銭湯の煙突

三角地帯に大きな煙突が立っている。銭湯の煙突だということは一目でわかる。そこは呑み屋街からすぐのところにある昔ながらの銭湯「千代の湯」（現在営業停止）である。呑み屋街の小径を煙突を探しながら歩くと見つかるという。確かに迷路の三角地帯にあってはその建物の入口や場所はよくわからないが、この煙突をたどれば銭湯に行きつくことができる。煙が出ているから銭湯の煙突なのだが、煙が出ていなければこの煙突は仏塔と見てもよい、そして銭湯自体も古代の修道院であると想像する。

世田谷区に住んでいた時は東急世田谷線若林駅近くの銭湯と世田谷通りと環状 7 号線が出来る前の通りの十字路のあたりにあった銭湯の 2 軒を利用していた。後者の銭湯は風呂が檜製で木のいい香りがした。木の風呂屋の向かい側には駄菓子屋があり、よくそこへ 10 円玉を握りしめて駄菓子や当時流行ったメンコを買いに行ったのを覚えている。三軒茶屋の銭湯は残念ながら入ったことはないが、今考えると銭湯のすぐ近くに居酒屋があるなんてなんと素晴らしい環境だったのだろう。

■第 2 の三角地帯

●雑然とする中に整頓あり

三軒茶屋には三角地帯がもう一つある。玉川通りを底辺にして 2 等辺三角形のような道が突き出している地域だ三角地帯の中はほぼ住宅地だが、囲んでいる道の周辺には商店や飲食店がぎっちり立ち並ぶ。こちらは第 1 の三角地帯ほどディープな雰囲気はなく、新時代の感覚やスタイルを取り入れた落ち着いた店舗が立ち並び、こちらは家庭的で落ち着いた商業空間が出来上がっている。店もほぼ建て替えられて清潔感があり、昭和文化の中に若干平成文化も交じっている。

ここもやはり飲食店が多い。例えば都内でも少なくなったレコード店やジャズ喫茶（カフェ）がこのエリアにある。二つの三角地帯を比較してみると、第一の三角地帯は戦後間もない復興時代の街、第二の三角地帯は高度成長期時代に造られた街というところか。ここも第一同様、懐かしきお店がたくさんあり、片っ端から全部入りたくなってしまうほどである。この二つの三角地帯は掘れば掘るほど面白いものが発見できそうなので、時々は顔を出してみようと思う。

●アナログレコードがかかるジャズ喫茶

目白から池袋　まちあるき

丹羽譲治

2025年5月11日、目白から池袋へとまちあるきしました。

目白駅から目白通りを西へ歩き、交差点を北に入り、しばらくすると、見慣れない光景に遭遇しました。住宅の敷地は大きく、区画に置かれた英語表記の黄色のサインが目に入ります。表札もなく、豊かな植栽で形成された街区です。後日調べると1933年、徳川義親侯爵の本邸敷地内に作られた高級住宅街で7000坪、33邸からなる「徳川ビレッジ」でした。
※徳川ビレッジに関して引用　https://www.tokugawa-village.jp/about/

次に、「豊島区立目白庭園」を訪れました。パンフレットに大野家の邸宅を1990年に整備し開園したとあります。目白駅から徒歩5分と近く、庭園面積は2842.73㎡で大きくないが、回遊式庭園としてコンパクトな佇まいが、心地よい。こんな庭園が近くにあれば、毎日訪れたいと思います。「赤鳥庵」は和室2室からなる建物で、事前予約(有料)で利用できます。

「自由学園明日館」へは、目白庭園から西武線の踏切を渡り北へ5分のところにあります。目白駅からだと7分ぐらいです。「自由学園明日館」は、午後2時からスタッフによる建物解説(50分程度)があり、それに参加しました。

学校として短命にもかかわらず、多目的に利用されているのは、フランク・ロイド・ライトによる空間作りが受け入れられたからと思います。スタッフによる解説とパンフレットから以下にまとめます。羽仁もと子(女性初の記者)・吉一夫妻は、家庭の友社(後に婦人の友社)を1903年に設立しました。自分達の娘を就学させるのに適切な学校がなかったので1921年に女学校「自由学園」を創設。婦人の友社の運動場に夫妻は、同じ教会(富士見町教会-飯田橋)に通っていた建築家遠藤新に相談すると、帝国ホテル建設で来日していたフランク・ロイド・ライトを紹介されました。遠藤新はチーフアシスタントとして帝国ホテルの設計に携わっていました。フランク・ロイド・ライトに設計を依頼すると、ライトの叔母が同じ趣旨の学校を運営されていたこともあり、1月中旬に依頼し、2月15日には設計契約を交わしました。校舎が完成する前に開校し、中央棟・西教室棟の完成は、1922年でした。1925年に東教室棟完成し、1927年に講堂完成。中央棟・西教室棟・東教室棟はフランク・ロイド・ライトと遠藤新の共作で、講堂は遠藤新設計でした。1924年に学生が増え続けたので移転計画を策定し、1934年に東久留米市に移転しました。建物の色はクリーム色、緑色、焦げ茶の3色です。屋根は何度か葺き替えられていて、戦後屋根材の銅板を盗まれて、現在は緑青銅板になっています。玄関付近の照明は行灯をイメージしたものです。事務所のある建物の列柱は、ハリボテで中に縦樋が入っています。軒樋がアスファルトで玉砂利を敷いた物で、すぐに玉砂利が縦樋に詰まり、修理したそうです。大正時代の学校は、東西に長く、中央に玄関があるのが一般的でしたが、この校舎では、玄関が4つあり、自由に入ることができました。生徒は洋服で靴履きでした。玄関は、ガラス窓で外と内をつなげています。1970年に雨漏りでマンションに建て替える案もありましたが保存運動で免れました。1997年国の重要文化財に指定され、1999年から2001年と2015年から2017年の保存修理工事(解体復元)を行いました。建具は内外とも焦げ茶色でしたが、生徒の絵から、最初の保存修理工事で、講堂以外の建具は外は緑色とし創建当時に戻しました。最初の保存修理工事費は3億6千万円でした。玄関の床は大谷石で、ラウンジの床は木で床材を変える時、段数の少ない階段を設けて調子を変えています。ライトの設計した住宅も同様低い天井から高い天井へと変えています。南面の大きなガラス窓は、開け閉めが大変なので2分割にされていたのを保存修理工事で1つに戻し、両端の窓だけ開閉できるようにしました。ガラス自体は創建当初のものは少ない。1931年に生徒が制作した壁画(出エジプト記)が陸軍省の命令で塗り込まれていたのを保存修理工事で元に戻しました。ライトの建築で重要な要素である暖炉は部屋の中央に置かれます。食堂への階段は狭く、登り切ると高い天井の空間に入ります。生徒が昼食を作り食事するところでした。当初バルコニーがありましたが、生徒の増加により建具を再利用して食堂を広げました。大きな照明は、ライトが現場に来て、生徒が座った状態を想像して空間が間延びしていると感じたので、1晩でデザインした照明です。ライトはルイス・サリバンに師事しました。フリーハンドの天才と言われたサリバンに対し、ライトは定規とコンパスで幾何学的構成でデザインしました。

「立教大学　池袋キャンパス」へは正門から入り、立教学院展示館を訪れました。この展示館は建設当初は、図書館本館として建設され、2012年まで使用されてました。2014年から展示館として活用されてます。2階が展示室となっています。階段を登って見上げると、上部の構造材に目を奪われます。窓も階段周りも趣が感じられ、展示什器も空間を意識してデザインされている。気持ちの良い空間です。次に本館を訪れました。教室の手前の空間の小さな階段、小さな扉と手を抜かずにデザインされています。教室の廊下も窓枠、照明とも良い空間でした。2号館・3号館の間を抜けてリラックス学生を見ながら第一食堂に向かいました。食堂は16時までと入ることができませんでした。他の食堂も16時までで、唯一タリーズコーヒーが池袋図書館の横にありました。築地から移転してきて1919年に建設された立教学院展示館・本館・1号館・2号館・第一食堂・チャペルの近くに建てられた建築は、最初の建築のデザインを継承して設計されていて、キャンパスとしてのまとまりが良いと思いました。当初建設された建築の内部堪能するために再訪したい。

目白駅

徳川ビレッジ　※黄色いサイン

豊島区立目白庭園

豊島区立目白庭園-小瀧

自由学園明日館

自由学園明日館-前庭

G棟の奥のH棟

講堂-講演会使用中

東玄関

東玄関から校舎を望む

雨樋を内蔵した柱

大教室

ホール-結婚10年記念

ホール-生徒が描いた絵

会議室

食堂

資料室

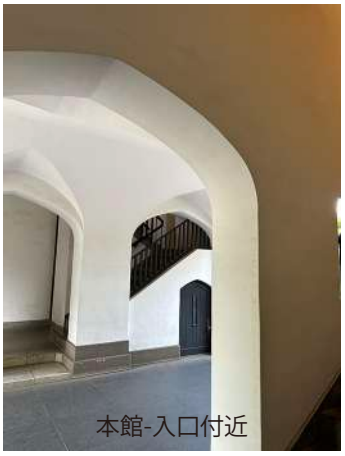
立教大学-池袋キャンパス

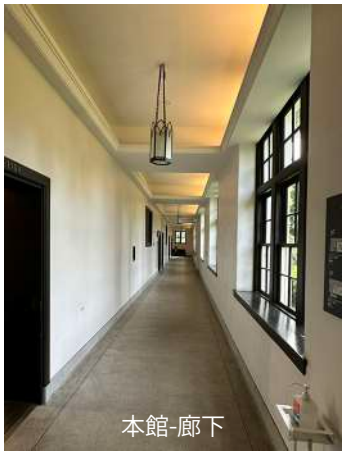
立教学院展示館-展示空間

立教学院展示館-階段周り

本館

本館-入口付近


本館-入口付近


本館-廊下

第一食堂を望む

2号館-脇

第一食堂-側面

11号館

8号館

3号館-脇

「豊島区立目白庭園」のパンフレットに「豊島区立上り屋敷公園」が記載されていたので調べました。Wikipediaによると「上り屋敷(あがりやしき)とは江戸時代の狩場における休憩所で、この地域の南側（豊島区目白・新宿区下落合）に広がる徳川家の狩猟地（おとめ山公園の項を参照）に来た将軍らのための休憩所がここにあったことが、地名の由来とされている。現在は「区立上り屋敷公園」や「上り屋敷町会」などにその名をとどめている。かつて西武池袋線にあった上り屋敷駅は、1953年（昭和28年）に廃駅となった。」　徳川ビレッジと関連があると期待しましたが、徳川義親侯爵は、麻布から移ってきたので、関係ありませんでした。「江戸大古地図」(別冊宝島2506号) 19.雑司ヶ谷 音羽絵図を見ると鬼子母神、護国寺の記載がありますが、山手線の内側で目白駅以西の記述がありません。しかし、現在の永青文庫のあたりに細川越中守の記載がありました。過去へ思いを馳せる事ができたのは、楽しいひとときでした。まちあるきも江戸時代の古地図から候補地を選定し、古地図を持ちながら探訪するのも良いと思いました。

＜ＬＦＪブックレヴュー 88＞

『長谷川潔　白昼に神を視る』　長谷川仁・竹本忠雄・魚津章夫編

1991 年　白水杜刊

斉藤全彦

長谷川潔（1891－1980）という名は同じ版画家で名を馳せた棟方志功（1903－1975）と比べると、あまり知られていない。それは両者が持つ画題の違いか、生き方の違いか、それぞれの持つ強い個性が自ら発散する何かによってかもしれない。二人は日本を代表する版画家でありほぼ同時代を生きたが、その生き方は全く異なるものであった。棟方志功は青森の刃物鍛冶を営む家に三男として生まれ、片や長谷川潔は第一国立銀行横浜支店長の父のもとに長男として横浜に生まれた。日清戦争が 1894 年、日露戦争が 1904 年に起こったことを鑑みれば、時代はまさに日本が国家として世界に近代化を成し遂げつつあることを示そうとした明治の後半という頃合いであった。1919 年４月４日パリに到着した長谷川潔は長くヨーロッパに留まり、フランス文化勲章を受章するほどの成功を収めながらも、1980 年京都国立近代美術館において自薦作品による「銅版画の巨匠・長谷川潔展」の開催を最後に、何故か分からぬが生前は一度も日本に戻らない生涯であった。

「それは、今次大戦中の事だった。・・・・・・その朝も遠くの雲を眺めたりしながら、いつも通る道を歩いていったのだったが、不意に一本のある樹木が燦然たる光を放って私に語りかけてきた。「ボンジュール！」と。私も「ボンジュール！」と答えた。するとその樹が、実に素晴らしいものに見えてきたのである・・・・・・・。」（『断章』）長谷川潔の数ある版画の中で、マニエール・ノワール（黒の技法）の作品を鑑賞していると、上にあげたような言葉が浮かんでくる。そこには、「絶対の黒と純粋な白の鮮やかな対照」（ロール・レイ）としてあらゆる存在が生きてくるのである。

日本の江戸時代後期の芸術が、フランスのそしてヨーロッパの近代芸術へ与えた影響は計り知れないが、21 世紀になる現代までその影響を与え続けている芸術家はそう多くはいない。その中でも長谷川潔ほど、現代芸術へ、即ち「芸術における存在と時間」という問いかけに対して影響を与え続けている芸術家は他にはいないだろう。長谷川が「私は、『美』を生み出している宇宙の法則と心理を探求しているのです。」と言うとき、まさに２１世紀の現代に、美を以って世界の謎に応えようとしているのが長谷川潔の芸術だと言えるのではないか。

長谷川が生み出す「黒」という色は色であって色ではない。それは、宇宙というこの何億光年もある世界の「存在」を示しているのであり、「白」はその宇宙のどこかから飛び込んで現れ来る光の数々を示しているのである。「魔術師長谷川にとって、地上に存在するあらゆるものが、宇宙のリズムに従っている。・・・・・・・・・・この瞑想家はかの精妙で味わい深い言語つまりは版画というポエジーにあふれる芸術言語で答えるのである。」（C・クンスレール著『神秘の示顕者』）

我々が景観を語るとき、忘れてはならないのが、目に入る存在するすべてに対して敬意を以って接し、そして、あらゆる存在に対し長谷川潔が示したように、存在する対象物は唯一無二の存在であることを自覚することが必要ではないだろうか。

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : https://www.keikan-forum.org

Landscape Forum of Japan